

No. 916

特 集

戦闘機、旅客機を落す

梅雨空があけて久しぶりの快晴、真青な空に一瞬せん光が走り、家を揺るがす爆発音が起った。7月30日、全日空旅客機と自衛隊戦闘機が空中衝突、乗客155人と乗員7人を乗せた旅客機は岩手県、零石町付近の山中に墜落、静かな山林は地獄絵と化した。

この日、定刻より45分程遅れて13時32分、千歳空港を飛びたった純白に青い線の全日空58便は、定期便航空路に進出した航空自衛隊F86F戦闘機と空中衝突、162名という、一機の犠牲者の数としては世界最大の死者を出した。

先に起った「ばんだい」の墜落からまだ一月もたっていない。

危険な日本の空、無限に広がる空中でさえも安全は保証されていなかった。一部には指摘されていながらも、そのまま放置されたままになっている不備な空の管理状態、その間にも次から次へと取返しのつかない大事故が繰返えされる。

防衛庁は『定期便航空路に進入した航空自衛隊F86F機のミスによるものと思われる』と事故の責任を事実上認めた。

こんどの事故は、自衛隊機が民間航空路上に進入して招いた惨事という点で、これまでの航空事故とは本質的に異なる。政府も、その点を認めたのか、就任間もない増原防衛庁長官を更迭、以後の安全を約束した。

しかし、自衛隊機が幅をきかず日本の空は、もう何年も前から過密状態。「四次防」による自衛隊増強計画や自衛隊のあり方、そのものを問われるところまでできているのではなかろうか。

戦闘機に『落とされた』旅客機の大半が遺族会であったとは皮肉なめぐりあわせである。